

楠誓英歌集

『薄明穹』

(短歌研究社)

死や喪失を感じさせる冷涼とした雰囲気、歌集を通して貫かれている。それは決して身近な人の死に留まらず、自分が肌で感じ取れる距離にある他者、創作上の人物、戦争・遠方の災害など自分と離れた人物の死など様々だ。

歌集は三部構成となっており、連作のほとんどに「橋」がキーワードとして現れる。渡っている「橋」という存在は船などとは異なり、彼岸と地続きになるような錯覚を読者に与える。

橋桁にゆらく光を見つめをり兄国へつづく窓ひらくまで

高架橋を仰げばくらきしづもりの線路の間は底抜けの空

爆破されし橋の痛みよ苦しげに咽喉のみどを水にひたしつづけて

歌集の表題である「薄明穹」は、日の出直前あるいは日没直後の薄明るい空を意味する。死や喪失への繋がりを多く収めたこの歌集において、生を感じる歌は生がテーマになっているという、その一点だけで眩しく光る。

喘ぎあへぎ坂をのぼりて手を置きしきみの電柱にわれも手をおく

喪失という通奏低音によって、生はより浮き彫りとなる。この薄明穹は、きつと夜明け前の空だろう。(宮 梓一)

榊原紘著

『推し短歌入門』

(左右社)

天才 と云うとき生まれる崖がありその双眸を一度見ただけ
榊原紘『koro』

著者は「一字や一単語で騒げる能力」が短歌に必要と言う。また「オタクは必ず短歌がうまくなりません。必ずです。私が保証します。」と断言する。冒頭の歌は繰り返し登場し、著者の自歌自註もとい、作歌の過程を知ることができ。「天才」という意味が強すぎる言葉は悪目立ちすると分かって置いていて、それを活かすための一字空けをあえて行っているという。解説文は、オタク特有の、早口で捲し立てるような、小気味良い筆致である。

著者はオタクを自称している。「オタク」と言うと特定の事物を偏愛するがゆえにバランスが悪く客観性に乏しいという印象が付き纏う。しかし、本書では各種技法を体系的に、実例を交え、対照実験を行いながら、短歌概論が包括的に扱われる。

雨の屋根つらなるプラハ ゴーレムの崩れたあたりに
僕は立つてる
榊原紘『悪友』

読みやすくするための「最終手段」として一字空けをしたとのことで、その効果を句読点の場合と比較しながら解説する。(冒頭の歌の一字空けとは狙いが異なる)

ポップな装丁や「入門」のタイトルとは裏腹に、本格的で、歌人をハッとさせる解説書だ。(清水佑太郎)